『大日経』「住心品」における心品転昇について
～「世間心」の解釈を中心に～

伊　藤　真　弘

1，はじめに

『大日経』「住心品」における心品転昇の過程のうち、菩提心を得るまでの過程は、大まかに言えば、凡夫が諸天を供養するまでの過程と、初期仏教から大乗仏教までの過程に大別される。本論では、凡夫が諸天を供養するまでの過程を「世間心」、初期仏教から大乗仏教までの過程を「出世間心」と称することとする。最終項に図をのせているが、「住心品」において具体的に説かれている教理のなかで、「出世間心の過程」は主に「三劫段」にみられる。「世間心の過程」に当てはまると考えられる教理は、「世間の八心」、いわゆる「順世の八心」と言われるものと「六十心」が挙げられる。「百六十心」については、本経中では、名称は散見されるものの、それが具体的に説かれているものではない。

「住心品」に説かれる世間心については、［津田1970］にて詳細な検証がなされている[1]。本論では、［津田1970］の再検討をしつつ、「住心品」に説かれる「世間の八心」「六十心」について取り挙げ、心品転昇との関わりを探りながら、世間心の過程を整理していくことを目的とする。特に、世間心の最も底辺にいる者が世間心の過程を転昇し、如何にして出世間心の過程にはいるのか。また、そのために何をすべきなのか、このことを明確にすることを目指した。そして今回は、本経「住心品」に説かれる世間心の過程を整理した上で、これに対する Buddhaguhya の『大日経広釈（以下『広釈』）』及び、『大日経摂義（以下『摂義』）』の解釈をまとめた。

2，『大日経』に説かれる世間心について

2－1，「六十心」と「百六十心」について

まず、本経「住心品」に説かれる「世間の八心」と「六十心」に関する

記述を取り挙げ、そこから読み取れる「住心品」の心品転昇の過程における位置付けを明らかにし、世間心の過程を整理していく。はじめに、「世間心の過程」において、「六十心」がどのように位置付けられるのかを明かす。「住心品」においては、次のように説かれている。

Tib　それから又、世尊に金剛手が尋ねられた。「世尊よ、それらの心の差別を説きたまえ。」そのようにして尋ねると、世尊は金剛手にこのように仰せになられた。「秘密主よ、心の差別を聴きなさい。秘密主よ、そこで、その心とは、貪りの心　～中略～　出生の心、である。」[2]

漢訳　爾時金剛手復請佛言。惟願世尊説彼心。如是説已。佛告金剛手祕密主言。祕密主諦聽心相。謂貪心。～中略～受生心。[3]

この記述は、金剛手が「心の差別を説きたまえ」と尋ね、これに対して世尊が「心の差別を聴きなさい」として、「六十心」が具に説かれている。つまり、『大日経』「住心品」における「心の差別」とは「六十心」である、と言える。さらに、この「心の差別」は、蔵訳の初品名「心差別品」に相応しているとされる。これは過去の研究[4]に於いても指摘されているが、この経中の一文と、相応する初品名から、「六十心」が重要な意味を持つものであると言われている。そして、本論では省略したが、「貪りの心」云々のように、本経中では、「六十心」についての種々相が説かれている。しかし、「六十心」が心品転昇の過程のうちの、どの段階に住する者に当てはまるのか、詳細に説かれているわけではないので、この件については、次に取り挙げる「百六十心」と併せて考えることとする。その「百六十心」は次のように説かれている。

Tib　すべてのことを汝に説くであろう//一心にあつめて聴きなさい//心は百六十を離れて//菩提そのもののために［生ずるのであって］// [5]

漢訳　我今悉開示一心應諦聽越百六十心生廣大功德[6]

Tib　このように、１，２，３，４，５，と２をかけるならば、有情界の

心は百六十である。三劫を以て超えると、出世間心が生じるのである。[7]

漢訳　祕密主一二三四五再數。凡百六十心。越世間三妄執。出世間心生。[8]

一つ目の説示は、「住心品」所説の「九句の発問」における如来の答説の１節である。この中の「心は百六十を離れ、菩提そのもののために」については、“百六十心を離れて菩提を生ずる”と理解でき、世間心と出世間心の、どちらにも当てはまることが言える。したがって、「百六十心」がどちらに位置付けられるのか、更に読み進め考察する必要がある。そして、二つ目の説示では、有情界の心は百六十であり、三劫を以て越えると出世間心が生じると説かれている。このように、有情界の百六十心を超えることによって、出世間心が生じるとされることから、「有情界の百六十心を超えること」によって、「世間心の過程」から「出世間心の過程」に転昇することができると考えられる。しかしながら、「住心品」を読む限りでは「六十心」と「百六十心」の関係が明確に説かれていないため、両者の関係性については、『広釈』と『摂義』における解釈を読み取りながら明らかにしていく。

2－2,「世間の八心」について

続いて「世間の八心」を取り挙げるが、この「世間の八心」は、第一心から第八心と、八つの過程を総称したもの。［津田1970］（註１）にもあるように、「世間心の過程」が示されていることが推測できるものである。はじめに、「世間の八心」について取り挙げる前に、「住心品」における「世間心の過程」に住す者とは、一体どのような者であるのかを確認しておく。まずは、「住心品」中の次の文脈を挙げる。

Tib　秘密主よ、そこで、無始輪廻において、諸々の愚童凡夫達は我にとらわれることと、我所にとらわれることに執着することによって、我の数え切れない区別を分別してしまうのである。[9]

漢訳　祕密主。無始生死愚童凡夫。執著我名我有。分別無量我分。[10]

この「住心品」の文は、「世間の八心」について説かれている箇所の冒

頭部分に見られるもので、愚童凡夫は、我にとらわれ、我所にとらわれ、我を分別してしまう者と説かれている。[津田1970]（註１）にも指摘されているように、おそらく、世間心に住する者でも、最も低い位置付けにあたるものと思われる。その愚童凡夫が、どのように転昇していくのか、まず、第一心の説示を取り挙げる。

Tib　秘密主よ、更に又、諸々の家畜に等しい愚童凡夫達から、①ある時ふと、法への想いが生ずることがある。すなわち、斎戒に住することに住するべきであると、そのことのみを思い、喜びを生じそのことをただ修習するのである。秘密主よ、これこそが、善が生ずる種子のようなものであって、第一の心である。[11]

漢訳　祕密主。愚童凡夫 類猶如羝羊。或時有一法想生。所謂持齋。彼 思惟此少分。發起歡喜。數數修習。祕密主。是初種子善業發生[12]

ここに、家畜と等しいとある。つまり、家畜のような者に法への想いが生じ、斎戒に住して、それを思い修習する。これが第一心とされる。第二心以降[13]は、第二心では親兄弟の親族に施物を与え、第三では見知らぬ人物に施物を与え、第四では器として相応しい者に施物を与え、第五は師あるいは音楽家、第六はそれを喜ぶ者に施物を与える事であって、このように、順に施物を与える相手がより大きい功徳となっていくと言えるのではないか。更に、第一心は種子、第二は芽、第三は茎、第四は葉、第五は花、第六は果実に譬えている。これは種を植えてから実がなるまでの植物の成長に譬えていると思われ、第一心から第二、第三と順々に世間の者が最も低い位置から転昇していく次第を現しているものと考えられる。そして、第七心は、天に生じる為に戒を守ることとし、養育者に喩えられている。最後に第八心は次のように説かれている。

Tib　秘密主よ、他にまた、そのような心で輪廻をさまよう時、ある善友から、このような言葉を聞く。「これらの天は大天であり、すべての者に幸福を与える。それに汝は供養し、あらゆるものを得る者になるであろう。それらはまた、すなわち、自在天・梵天・あるいは那羅延天・商羯羅　～中略～　賢者はそれらの諸天に供養しなさ

い。」その善友から、このような言葉を聞くと、意は喜び、時に、よく敬う気持ちが起きて、それらの［諸天を供養するように］努めるのである。秘密主よ、これこそは、輪廻に流転する諸々の愚童凡夫達の蘇息の最勝なるものであって、能力なるものにして、第八心であると、諸々の勝者によって説かれたのである。[14]

漢訳　復次祕密主。以此心生死流轉。於善友所。聞如是言。此是天大天。與一切樂者。若虔誠供養。一切所願皆滿。所謂自在天。梵天那羅延天。商羯羅天～中略～大圍陀論師。各各應善供養。彼聞如是。心懷慶悦。殷重恭敬。隨順修行。祕密主。是名愚童異生。生 死流轉無畏依。第八嬰童心。[15]

このように、第八心では、自在天・梵天を初めとする諸天を敬い、よく供養することに努めること、と説かれている。このように、諸天を敬い供養する第八心の段階こそが、世間心の過程の中で、最上位に当たることが推測できる。更に、第八心における世間者について、次の様に説かれている。

Tib　秘密主よ、また次に、②殊勝なることを知る者にして所説の殊勝なることそれぞれに、特に住する者達には唯一性の義に関して智慧が生ずるのである。[16]［しかし、まだ第八心の彼らは］それはまた存在する［存在すると］、ただ空性にすぎないものを、実在すると思うのである。秘密主よ、彼らは空性を特に知らないのである。空性は実在でもなく、非実在でもないのである。有でもなく、無でもなく、その両者でもないのである。そこには、分別も或いは無分別もないのに、それをどのようにして、空と観察するのであろうか。
空性を知らない者達、彼らは涅槃を知らない。
その故に存在と非存在とを、［両者を］滅する事を以て空性を知るべきである。[17]

漢訳　祕密主。復次殊勝行。隨彼所説中。殊勝住求解脱慧生。所謂常無常空。隨順如是説。祕密主。非彼知解空非空常斷。非有非無俱彼分別無分別。云何分別空。不知諸空。非彼能知涅槃。是故應了知空離於斷常[18]

殊勝なることに特に住する者達は、唯一性の義に関して智慧（’ba’ zhig pa nyid kyi don du blo）が生じるとされている。唯一性の義とは、直訳すれば「唯一の自性を理解する知恵」という意味となり、漢訳では「求解脱慧」とされる。つまり、解脱のための智慧が生じるのである。この、殊勝なることに住する者とは、第八心に住する者であると考えられる。第八心の世間者達は、空性にすぎないものを、実在すると言って、空性を理解していないとされ、空性は実在でも非実在でもないということを、まだ知らないのだと説かれていることが分かる。ここまでのことを確認すると、［世間心において、最も低い位置の者は、我・我所にとらわれて、譬えれば、家畜のような愚童凡夫である。そして、植物が種子から果実がなるまで成長するように、世間心の者も順々に転昇し、殊勝なる第八心に達し、唯一性の義に関しての智慧が生じる。しかし、まだ、第八心の者は、空性に過ぎないものを実在すると言って、空性を理解するには至っていない。］この流れが、世間の次第となるだろうと言える。

2－3，まとめ

本経中に、「有情界の心は百六十である。三劫を以て越えると出世間心が生じる。」とあることから、「有情界の百六十心を越えること」が、世間心から出世間心に転昇するために必要となるだろう。しかし、これはあくまで推測にすぎない。また、六十心と百六十心の関係性については、更に検討する必要がある。更に、世間心の過程はおそらく、世間の八心が当てはまるだろう。家畜のような愚童凡夫が最底辺の者であり、その者が、法への想いが生じ斎戒に住するとされる第一心に入る。つまり、凡夫が世間の八心の第一心に入った段階を心品転昇の過程に入ったとする、このような推測が成り立つだろう。

3，Buddhaguhya の解釈

3－1，『広釈』における解釈

3－1－1，「六十心」及び「百六十心」について

ここでは、『広釈』における解釈を取り挙げていく。はじめに、「六十心」と「百六十心」との関係を Buddhaguhya がどのように解釈してい

るのか。又、「六十心」を越えるべきはどの過程に住す者なのか、この２点に注目してまとめる。

広釈　「その時また世尊に金剛手が請問すらく。③世尊よ、願わくばそれら心の差別を説きたまえ」とは、先に④「百六十の心の差別を越えて菩提心生ず」と説かれたれば、それら心の差別の相や云何、願わくば説きたまえとせらるべきなり。　～中略～　そのうち、⑤それらの心より越ゆべきこともまた総じて真言の門より行ずることにして二種あり。すなわち得悉地（成就）者と有三昧耶となり。そのうち得悉地（成就）者とは信解行地より心の自性たる身をもって欲する何処にも転昇する（ことが出来るが）故に、（修行の）次第や劫の（区）節もまた（必要）なし。有三昧耶においても二種ありて、鈍根と利根なり。[19]

広釈　そのうち、鈍根とは最初に世間者の道たる空性に唯一（性）の慧を生じたことより転昇して、人に無我を証するなり。されば、⑥それらの心はまた、苦性と無常性と空性と無我を証して、捨を習熟すれば、⑦世間者の道より始めて三劫の間に人無我を学び了りて、ついで蘊は有りと思う慧を生ずること（と）、これまた遮遣して蘊等のものは幻化と陽焔の如しと法無我を証して、三心（入住起）を学ぶことと波羅蜜等をよく行ずる相たる信解行地に入るなり。

利根のものは最初より人法二無我を証するが故に、それらの心もまた幻化と陽焔の道をもって捨て、かつ三心を学ぶことと、諸波羅蜜をよく行ずる次第をもってかの信解行地を一劫をもって円満して、その四分の一劫をもって智地に入るなり。

信解行地に入り了って、利根と鈍根の両者はまたその信解行地を一劫をもって円満すること、智地に四分の一劫をもって入ることは等しきなり。[20]

まず一つ目の記述だが、下線③は本経「六十心」についての記述の冒頭部分の引用で、下線④は本経「九句の発問」の「百六十心」の記述の引用である。「心の差別」とは何か、という観点からこの『広釈』の記述を読

めば、Buddhaguhya は、「心の差別」を「六十心」だけではなく「百六十心」も併せて考えており、両者を区別していないことが伺える。また、下線⑤「それらの心」は、おそらく「百六十心」（含「六十心」）のことだろう。これを越えることに二種あり、得悉地者と有三昧耶であるとされる。二つ目の記述によれば、有三昧耶の鈍根の者とは、人無我を証するとされる。唯一（性）の智慧が生じるのは、世間心の過程の第八心であり、人無我は出世間心の過程である。利根の者は、初めから人法二無我を証している、と述べられている。この２つの記述から、「六十心」は、基本的には世間心に住する者が超えるべきものと考えることが出来る。更に、Buddhaguhya が、出世間心の過程の信解行地まで考慮に入れて解釈していることも読み取れる。このことを考えるなら、例えば、［津田1970］においても、

> 「「是の如く百六十心を信解行地より浄除して、その信解行地を円満する。」かくて、百六十心を「世間百六十心」に限定する考えでは割り切れない事態が生ずる。百六十心は信解行地の段階に於いても「浄除」されているのである。」（P119(4).L8～10）

のように指摘されている。これらを理解するには、信解行地の位置付けを明確にしなければならない。詳細は省くが、Buddhaguhya は、信解行地から転昇して、初地歓喜地において、菩提心が生ずるものであると考えられている。つまり、「六十心」は世間心だけではなく出世間心に住する者にも当てはまる可能性がある。この「六十心」の問題について、並びに、「百六十心」と「六十心」の関わりについて Buddhaguhya が解釈しているだろう箇所を、次に取り挙げる。

> 広釈　「百六十心より　　越えて生ぜん」
> と合すべし。されば、⑧世間者の百六十心より越えて、法無我を証して信解行地において三心（入住起）をよく学ぶべきことと、諸波羅蜜をよく行ずべきことと、四摂事をなし了って、信解行地より転生して、歓喜地心たる智地に入ったものとせられるべきなり。[21]

このように、「世間者の百六十心」とはっきり定義している。よって、「百六十心」を超えて出世間心の段階に入るとされることは、間違いない

だろうと思われる。更に、信解行地から転昇し歓喜地心たる智地に入るとも述べている。このように、「百六十心」が信解行地にまで及ぶことが読み取れるのである。更に、Buddhaguhya は、「六十心」と「百六十心」の関係について、次のように述べている。

広釈　六十心の事象等より百六十と増大することはまた、三微細障と開きて、それら三をそれぞれ三三と開くことをもって九種と見るべし。そのうち大障の大においては一心を捨てて、大の中においては二（心）を捨て、大の小においては三（心）を捨て、中の大においては四（心）を捨て、中の中においては五（心）を捨て、中の小においては六（心）を捨て、小の大においては七（心）を捨て、小の中においては八（心）を捨て、以下に出す方法をもってかくの如く百六十心を信解行地より出過して、その信解行地を円満せしむるなり。そのうち九（心）等の最後の小中の小は、信解行地より転昇して捨てるなり。されば、智地に入ると知るべし。[22]

この記述によれば、六十心から百六十心へ増大することは、三つの微細な障礙を、それぞれ三つに分類し、九種と見るべき事と同じであるとされる。これから察して、大きい枠組みの百六十心に、六十心が含まれると考えることが出来るのではないか。そして、大障礙から、大ノ中、大ノ小、と順に捨て去って、第八の小ノ中障礙を捨てることは、信解行地を円満することと等しいと述べられている。更に、第九の小ノ小障礙は、信解行地から転昇して捨て去って智地に入るのだと解釈されている。つまり、この、小ノ小障礙は、信解行地より転昇して智地に入るまでに用する四分の一劫に当てはまるものと推測出来るのである。よって、百六十心とは、信解行地にまで及ぶと考えられるのは間違いないだろう。また、これは九種というより、九の段階として見ることが出来ると思われる。しかし、そのまま心品転昇の構造となるのではなく、その次第それぞれに対応するために、九種に分類しているのではないか、と考えられる。［津田1970］の解釈[23]に頼って考えるならば、例えば（1）貪りの心は、貪りを有する法に親近する、と本経には説かれている。まずこれを大の障礙と考える。これは、Buddhaguhya も世間の心に限って述べているが、これを出世間の者に対

応して考えるなら、例えば、出世間心の一番目では、蘊等の法によって存在すると覚って、人無我を証するが、この蘊等の法に対する執着に対応して、この執着を貪りの心と考え、小の障礙とすることが可能となるわけである。

3－1－2,「世間の八心」について

続いては、『広釈』における「世間の八心」の解釈を取り挙げる。前章では、「住心品」を読む限りでは、これが世間心の過程に当てはまるという推測を立てたが、ここでは、Buddhaguhya が、「世間の八心」をどの過程に当てはまると考えているのか、という点に注目した。

広釈　⑨「秘密主よ、さて無始の輪廻より愚童凡夫達は」というより、「破壊して空性と知るべし」とに至るまでをもっては、世尊ヴァイローチャナの因を釈されたり。されば、その因もまた二種なり。そのうち、世間者の百六十心等はヴァイローチャナの近取因なり。他の地と波羅蜜は同作因なり。かくなれば、凡夫にもまた二種ありて、世間者の本分を知る者と知らざる者なり。そのうち、愚童とは悪言と悪行と悪思するものにして、かれらはまた本分をも知らざる者なり。それ以外のものはそれぞれの本分を知る者にして、聖道を得た者とせらるべきなり。されば、かれらは生死の（中）において三苦によりて苦悩し、その苦悩より解脱せんがために我と我所を分別したそれ等に依止して、施等をなして解脱を願う者なり。我と我所なるものに執着して無数の我執において分別するかれらはまた、我という自性はどのようなものかを吟味せずに染着を生ずる者にして、それぞれの本分を知らざる愚童達なり。[24]

冒頭の文中にある、「破壊して空性と知るべし」とは、本経中に説かれる「世間の八心」本文の、第八心の結びの言葉であり、つまりは、「世間の八心は毘盧遮那の因となる」ということが出来る。その因は二種あって、近取因[25]と同作因[26]であるとされる。その近取因は、世間者の百六十心等であると述べられており、『広釈』においては、「世間の八心」や「百六十心」が毘盧遮那の因となるという解釈がなされている。また、世間の者に

も二種あって、世間者の本分を知らない者と、本分を知る者である、ということが述べられている。その記述をまとめると、本分を知らない者とは、悪言・悪行をする愚童のことで、世間心に住する者で最も低い位置にあたる者を指すと思われる。本分を知る者とは、生死において三苦[27]に苦悩し、そこから解脱しようと我・我所を分別したものに依止し、施等をなして解脱を願う者。「施をなす」と述べていることから、これは、「世間の八心」の段階の者と思われる。つまり、世間者の本分を知らない者が、施等をなして解脱を願う者になると、その者は世間の本分を知る者になる、という考えが出来る。このように、Buddhaguhya が「世間の八心は毘盧遮那の因となる」と解釈していることから考えて、「住心品」の心品転昇の構造の中に、出世間心よりも前の段階に、「世間心の過程」として「世間の八心」が組み込まれることが推測できる。更に Buddhaguhya は、第八心の者について、そして、毘盧遮那の因となることについて、次のように解釈している。

広釈　「次いで秘密主よ、また次に差別を了解する者にして、正しく称された彼此の差別等を差別して住するもの等に唯一性を（得しめんが）ための慧を生じて、それもまた有りと空性そのものにおいて実体を思惟するなり。されば」（とは）、先に我の本質を述べたもの等と教師たる諸天の自性にして正しく述べられた如く知りて我を分別したるとは、かれら諸天に依止してかれら諸天が示した経文によりて業と煩悩を捨てて清浄な我を分別する者にして、その清浄もまた空性たる涅槃なりと思う慧を生ずるなり。されば、空性において安楽と苦を享受せしむる自性としての我という実体は小粒程か、毛の一条等程のものとしてありと分別するなり。すなわち、それらは愚童凡夫達が（その）我と諸天に依止して自らの解脱を求むることにして、その解脱を求むる安楽もまた、世尊ヴァイローチャナの相続の因と見るべし。[28]

広釈　大自在天と梵天を首とするかれら諸天もまた一般には二種の有情にして、業より生じたものと、智薩埵なり。そのうち、この場合においては、⑩かれら諸天はまた、輪廻に流転する愚童凡夫達に対して

それぞれの涅槃の道を示す者にして、その道を示すこととはまた世尊ヴァイローチャナが知りたまいて証得する因と相応するものなるが故に、自在天や帝釈天を首とするかれら諸天は世尊ヴァイローチャナの身より化作せる智薩埵と見るべし。[29]

本経中には第八心については、諸天に対する帰依が説かれていた。Buddhaguhya は、「諸天によって示された経文によって、業と煩悩を捨て、清浄なる我を分別し、それを空性たる涅槃であると思う智慧が生ずる。」と、述べている。更に、諸天に帰依して解脱を求める安楽が、毘盧遮那の相続の因となるとも述べられているが、なぜ毘盧遮那の相続の因となるのか。それは、二つ目に取り挙げた記述に分かる。Buddhaguhya は、彼ら諸天は、輪廻に流転する凡夫達に対して、それぞれの涅槃の道を示す者であって、その道を示すことは、毘盧遮那が証得する因と相応すると述べている。そして、自在天・梵天等の諸天は、毘盧遮那の身より化作した智薩埵と見るべきとも述べられている。

このように、『広釈』によれば、「世間の八心」というのは「住心品」の心品転昇の構造の中に、「世間心の過程」として、組み込むことが出来ることが確認できた。

3－2,『摂義』における解釈

続いては、更に Buddhaguhya の解釈を理解するために、彼が『摂義』において、「世間の八心」と「六十心」・「百六十心」をどのように解釈しているのかをみていく。はじめに、Buddhaguhya が『摂義』において、「百六十心」をどのような解釈をしているのかをみていく。

摂義　これは、瑜伽者が、人無我に悟入するか、あるいは人法（二）無我を証悟することに相応しない分になるので、そのために、人無我を悟ることによって〔百六十心は〕捨てさるべきであり、人法（二）無我道を悟ることにより捨棄さるべきである。[30]

この記述の冒頭にある、「これは」というのは、例えば北村訳[31]では「これ以上は」と補って訳されている。ここで取り挙げた文章は、彼の

「六十心」から「百六十心」を算出する方法についての記述に続いて述べられている。Buddhaguhya の百六十心の算出法によれば、余りの数が出てしまうことになり、おそらく、この余数が相応しない分とされるのではないか、と考えられる。そして、この記述に、人無我を悟ることによって捨てるべき事と、人法二無我を悟ることによって捨て去るべき事が述べられているので、Buddhaguhya の解釈では「百六十心」は、信解行地の位にまで及ぶとされることは間違いないだろうと考える。又、「世間の八心」について、『摂義』では次の様に解釈されている。

摂義　このタントラ（住心品）に、

　　羝羊に等しい異生凡夫より稀に、時として。ある者が法想を現ずる。すなわち、持斎に住すべきである。

云々から、

　　これが力となって、第八心をお説きになられた。

とまでが説かれている。その故に、我等の我慢を作すものが、執持せる施、戒等を修習する次第をもって、世間道を示す毘紐奴（viṣṇu）と大天（湿婆 śiva）と梵天（brahman）の教えを允許するのは、彼らの教えに随う者たちに彼らの論の義を悟らしめて、彼らが親しく説く道によって、唯それだけに慧を起こして“これなり”とて、自ら業と煩悩などの索と共に生ずることと客塵（煩悩）を離れるだけの実体が、まさにそれだけということである。そのために、まさにそれだけの相の解脱においてもこれら一切の不浄の城はなく、我のみが微細にして不分明であり、毛先の十万分の一ほどの身であると、了知する。その故に、我に執するかれらは、一切法の空性のみを了知するので勝道ではない、と説き、これも捨てさるべきであると述べ、〔住心品〕に、

　　「秘密主よ、復た次に、殊勝を了解することは、凡そ説かれたそれぞれの殊勝において、殊勝に住する者たちのための慧を生じ、それをまた、有なりとて空性においてのみ事実を考えて」

云々から、

　　「空性を知らざる彼らは涅槃を知らず」

とまでに説かれている。その故に、⑪この次第は、これによって善

知識に正しく説かれる。すなわち、正理と教令等によって聞・思より生ずる智によって、世間道はまた解脱道に非ずと、決択して、出世間道を説く善知識に依止するのである。[32]

まず、下線⑪の「この次第」とは、前後の文脈から、「世間の八心」を指しているものと考える。このように、『摂義』では、“我”はまだ毛先の数万分の一ほどに存在すると想い、まだ空性を知らないと思い知ることで、世間道はまだ解脱道ではないと決心し、出世間道を説く善知識に依止する、ということが述べられている。ここで、「出世間道」と述べているが、この「出世間の道」とはいかなるものか、又、世間道から出世間道へと入る事、それらが読み取れる『摂義』の箇所を次に示す。

摂義　それに示されるのは、出世間道によって解脱するために、精進を始めることである。その道は、ここではまた大毘盧遮那の位を得る相の解脱道である。というのが趣意である。

　それ（大毘盧遮那の位）に入る者は、また、これに、鈍根の衆生と利根の衆生の別により、人無我に通達することと、人法〔二〕無我に通達する門から二種に説かれる。[33]

摂義　そのうち、鈍根の者は、まず最初に、世間道のみの道を捨てて人無我を了解する道に入り、後に、貪著心等の相をもつ世間の百六十心を生ずるようなもろもろを捨て、人無我を了解する。[34]

摂義　利根の瑜伽者は、まず最初に「我」等と蘊と界と処と所執と能執の分別を消除して、世間の百六十心を超え、人法〔二〕無我に入り～中略～その故に、鈍根と利根の者たちと別に、人無我の道を修習せしめるか、あるいは、利根者には、人法〔二〕無我の道を修せしめるなら、鈍根の瑜伽者は、貪心をはじめとする世間の百六十心を捨することを先行とし、次第に、預流果に入る等八果（四向四果）を得る。[35]

ここで、人無我に通達することと、人法二無我に通達することが述べられているが、前者は出世間の一番目、後者は出世間の二番目に当てはまる

ものであろう。つまり、これが出世間道であろうと思われる。具体的には、鈍根の者は声聞・縁覚で、人無我を証す。利根の者は大乗の菩薩を指し、人法二無我を証す。これをBuddhaguhyaの『大日経』解釈に依って言えば、鈍根の者は、まず世間道のみを捨て人無我道に入り、世間の百六十心を捨て人無我を了解する。利根の者は、最初から蘊等の分別を離れており、世間の百六十心を越えて人法二無我に入る者とされる。これが、出世間道であり、大毘盧遮那の位を得る相の解脱道、とされている。彼は、世間道たる世間の八心を超え、世間の百六十心を超えてから人無我、及び人法二無我に通達することを想定していることが読み取れる。

3－3，まとめ

Buddhaguhyaは、世間の者が越えるべき「心の差別」を、六十心と百六十心を区別せずに、「世間の百六十心」と考えている。そして、機根による違いはあるものの、世間の百六十心を越えて人無我を証し、信解行地を円満することが述べられている。『摂義』でも、出世間の人無我を証す段階や、人法二無我を証す段階においても越えるべきこととして述べられており、Buddhaguhyaは、世間の百六十心は信解行地にまで及ぶものと考えている。

又、「住心品」の心品転昇の構造の世間心の段階に、「世間の八心」を組み込むことが出来ると考えられる。世間者の本分を知らない愚童凡夫が、世間の八心たる世間心の段階に入り、世間の本分を知る者となる。そこから、第八心に至り、諸天に帰依し、業・煩悩を捨て清浄を分別し、空性たる涅槃であると思う智慧が生じる。しかし、まだ「我」は毛の数万分の一ほどあると思い、世間心から出世間心の道に入る。

4，おわりに

以上、Buddhaguhyaの解釈をまとめると、「住心品」の心品転昇の構造に組み込まれるべきは、「世間の八心」である事が再確認できた。また、世間の者が越えるべき「心の差別」としての「世間の百六十心」は、出世間心の、信解行地の者にまで当てはまるものと考えられる。

世間の本分を知らない愚童凡夫達が、ある時ふと、法への想いが生じ、

斎戒に住する。ここで、世間の八心の第一心に入るのである。そして、第二心に入り、施等をなして解脱を求める者となり、世間の本分を知る者となる。そこから順に転昇し第八心に至り、世間者は諸天に依止し、業・煩悩を捨て、我を分別し、それが空性たる涅槃であるという智慧が生じる。しかし、これはまだ、空性をよく知ったということではなく、“我”は微細に存在すると想い、出世間の道に入ることを決心する。又、Buddhaguhya が機根をどのように解釈しているのか、検証しなければいけないが、「世間の百六十心」とは、世間心の者だけではなく、ある者は出世間心の人無我を証す段階、ある者は人法二無我を証す段階において越えるべき「心の差別」と考えることが出来る。

図：『広釈』の信解行地解釈を基にした心品転昇（世間心を除く）

出世間心の一番目＝初期仏教（声聞・縁覚）
↓　＝人無我を証す
出世間心の二番目＝大乗仏教
↓　＝信解行地　←　一劫
［三心（入・住・起）を修す］
法無我を証す
↓　←　四分の一劫
＊法無我性からも離れ、本不生を覚る
真言門　↓
＊極無自性心を生ず＝初めの菩提心（成仏の因）＝ 初地
↓ ← 十波羅蜜
第十地

（大正大学綜合仏教研究所研究生）

[1] 津田真一『百六十心の研究－大日経住心品の体系化の試み－』豊山学報14・15号 1970年
［津田1970］の結論を示すと、それは、
「百六十心とは、心が向上する場合の竪の九段階の各々に対応する横のひろがりであるところの百六十の dṅos po としての心を意味する」P111(12).l2～3
とある。他にも、世間の八心に関しては、同じく、
「先ず、buddhaguhya の解釈に従って、「心品転昇の次第」即ち、個人存在が上昇して究極的実在に至る階梯を概観しよう
（1）世間心
（イ）世間の三昧耶を知らざるもの。愚童・異生
（ロ）世間の三昧耶を知るもの。経に云う世間八心、三十種外道。～中略～この段階では、諸の神、神我に依止し、布施持斉によって解脱を求める。」(P121(2).l22～ P120(3).l2)
とある。

[2] ラサ版（L.）［Case：No.86 経典番号：No.462］を中心に、デルゲ版（D.）［東北目録No.494］を使用。校訂本として、［宮坂宥勝「インド古典研究 ACTA INDOLOGICA Ⅶ」成田山新勝寺　1995年］を参照した。
L.183b4－184a7

[3] 大正蔵 vol.18 2c

[4] 津田真一『住心の意味』　豊山教学大会紀要第2号　1974年
更に遡れば、［田島隆純『蔵漢対訳大日経住心品』付録『大日経蔵漢両訳比較研究概観』1927年］においても指摘されている。
他に世間心（特に六十心）の研究では、［津田真一『百六十心の研究－大日経住心品の体系化の試み－』豊山学報14・15号　1970年］がある。

[5] L.181b6

[6] 大正蔵vol.18 2a

[7] L.186a6～a7

[8] 大正蔵vol.18 3a

[9] L.182a2～a3

[10] 大正蔵No.848 vol.18 2a26

[11] L.182a7～b3

[12] 大正蔵vol.18 2b

[13] de rgyu de nyid kyi mtshan ma dang bcas pa'i nyi ma de dang de dag la pha ma dang /bu dang /bu ma dang /mdza' bshes dang /nye du dag la sbyin pa sbyin par byed de/'di ni myu gu lta bu ste gnyis pa'o//
その者は、因そのものの相とともなるそれぞれの日に、父母と男と女と友人と親族らに施物を与えるのである。これこそが、芽のようなものであって、第二［心］である。

gzhan yang sbyin pa de nyid mi shes pa dag la yang sbyin par byed de/'di ni sdong bu lta bu ste gsum pa'o//
さらに、施物そのものを見知らぬ人達にもまた、あたえるのである。これこそが茎のごとく第三［心］である。
gzhan yang sbyin pa de nyid snod du rung ba yongs su tshol zhing sbyin par byed de/'di ni lo ma lta bu ste bzhi pa'o//
また次に、施物そのものを、器として相応しい者を探し求めて与えるのである。これこそが、葉のごとく第四［心］である。
gzhan yang sbyin pa te nyid bla m'am rol mo mkhan la dga' bzhin du sbyin par byed de/'di ni me tog lta bu ste lnga pa'o//
他にまた、施物そのものを、師或いは音楽家達に喜んで与えるのである。これこそは、花の如く第五［心］である。
gzhan yang sbyin pa de nyid yid dga' ba dag la sbyin par byed de/'di ni 'bras bu lta bu ste drug pa'o//
他にまた、施物そのものを、喜ぶ者達に与えるのである。これこそは、果実の如く、第六［心］である。
gsang ba pa'i bdag po gzhan yang mtho ris su skye bar bya ba'i phyir tshul khyims bsrung ste/'di ni gsos su gyur pa ste bdug pa'o//
秘密主よ、他にまた、天に生ずる為に戒を守ること、これは、養育者のことであって、第七［心］である。

[14] L.182b7～a7

[15] 大正蔵 vol.18 2b

[16] khyad par rtogs pa ci skad du yongs su bsgrags pa'i khyad par de dang de dag la khyad par du gnas pa rnams la 'da' zhig pa nyid kyi don du blo skye zhing

[17] L.183a7～b4

[18] 大正蔵 vol.18 2b～c

[19] 酒井真典著「大日経広釈全訳」酒井真典著作集第2巻1987年法蔵館（酒井訳）を使用した。
また、遠藤祐純『蔵漢対照『大日経』と『広釈』上』ノンブル社2010年を適宜参照。
酒井訳：P37．10～18

[20] 酒井訳：P38．1～9

[21] 酒井訳：P31．7～10

[22] 酒井訳：P38．10～15

[23] P114(9).l7～

[24] 酒井訳：P32．9～17

[25] upādāna-kāraṇa

[26] saha-kāri-kāraṇa

[27] 貪・瞋・癡

[28] 酒井訳：P35．18〜P36．7

[29] 酒井訳：P36．8〜11

[30] 遠藤祐純著『『大日経摂義』和訳　全』2012年ノンブル社（遠藤訳）を使用し、北村太道著『チベット文和訳大日経略釈』1980年文政堂　を適宜参照。

遠藤訳 P67

六十心を百六十心に増分する事の詳細は、『摂義』（遠藤訳P65〜P67）に述べられている。そこから割り出される計算式は［60/1+60/2+60/3+60/4+60/5+60/6+60/8+60/10=160］となる。

尚、『大日経疏』の説は、貪瞋痴慢疑の五根本煩悩に基づき、［5×25］となる。大正39・600中

[31] 北村訳 P21．9〜12

[32] 遠藤訳 P60．2〜P61．6

[33] 遠藤訳 P61．9〜14

[34] 遠藤訳 P61．17〜18

[35] 遠藤訳 P62．7〜15